

(資料1)

兵庫県の西宮市環境衛生局が平成2年にまとめた「ダニアレルギー調査報告」では、「ぜんそく発作の誘発は、寝室を含めて床のダニ数との関連は余り認められず、使用している寝具類のダニ数がぜんそく発作に大きく関連していることが傾向として認められる」と結論づけています。

さらに調査総括として、「(ぜんそく患者のいる家庭でカーペット、畳などの床材を)フローリング、コルク等、フラットな材質に改造することは、好みの問題であっても決して疫学的に積極的意義のあることではない」としています。

(資料2)

スウェーデンの中央統計局によると、1975年から20年間にわたりカーペットの施工面積は減り続けた一方、同期間でアレルギー患者は激増しました。

また同じスウェーデンにおいて、カーペットを敷いている学校とそうでない学校の両方でアレルギー患者数の割合を調べたところ、敷いていない学校の方が患者数の割合が多かったという結果が出ました。

(資料3)

ドイツのアレルギー関連研究機関は、「室内の細かいほこりの量は、床一面にカーペットを敷くことによって劇的に減少する」(「ALLERGIE konkret」2005年2月)ことを証明。「床に何も敷いていないむき出しの場合、空気中の浮遊する細かい粒子が増える危険性が増し、床一面にカーペットを敷いている場合、この危険性を最小にすることができる」(同)としています。

(資料4)

日本カーペット工業組合は、カーペットとフローリングでハウスダストの舞い上がり量(歩行を想定)を比較検証し、カーペットでの舞い上がり量はフローリングのわずか10分の1(瞬間的には最大20分の1)であることを実証しました(実験は大阪産業技術研究所で実施)。

それぞれの詳細については組合事務局までお問い合わせください。